

8月の栽培管理

リンゴ

○生育状況

果実肥大は干ばつの影響で停滞しており、いずれの品種も平年より小さい。硬度は平年より高く、「ふじ」においては計測不能である。

表1 県南部のリンゴの肥大状況（果樹試験場：横手市 令和7年8月1日現在）

樹種	品種	項目	計測値			対比(%)	
			本年	平年	前年	平年	前年
リンゴ	つがる	果重(g)	146.4	178.7	218.4	82%	67%
		縦径(cm)	6.18	6.62	7.11	93%	87%
		横径(cm)	7.08	7.56	8.04	94%	88%
		硬度(lbs)	18.9	17.8	17.9	106%	106%
		糖度(Brix %)	10.7	9.6	9.1	111%	118%
		リンゴ酸(g/100ml)	0.337	0.412	0.378	82%	89%
	やたか	果重(g)	132.4	155.8	201.9	85%	66%
		縦径(cm)	6.04	6.31	6.83	96%	88%
		横径(cm)	6.73	7.21	7.81	93%	86%
		硬度(lbs)	25.4	21.3	19.9	119%	128%
		糖度(Brix %)	10.5	9.0	8.7	117%	121%
		リンゴ酸(g/100ml)	0.531	0.583	0.550	91%	97%
	王林	果重(g)	120.4	137.5	145.6	88%	83%
		縦径(cm)	6.24	6.47	6.63	96%	94%
		横径(cm)	6.30	6.51	6.78	97%	93%
		硬度(lbs)	27.2	24.2	24.8	112%	110%
		糖度(Brix %)	10.2	9.1	8.9	112%	115%
		リンゴ酸(g/100ml)	0.578	0.512	0.451	113%	128%
	ふじ	果重(g)	88.5	123.4	149.8	72%	59%
		縦径(cm)	5.12	5.80	6.22	88%	82%
		横径(cm)	5.98	6.61	7.07	90%	85%
		硬度(lbs)	—	25.9	25.9	—	—
		糖度(Brix %)	10.1	8.6	8.4	117%	120%
		リンゴ酸(g/100ml)	0.577	0.547	0.514	105%	112%

※平年値：平成27年～令和6年（10か年）の平均値。

1 乾燥対策

本年は6月中旬以降まとまった降雨がなく、高温乾燥が続いている。土壌の乾燥は、生育の停滞や黄変落葉、樹勢低下の原因となるほか、日焼けを助長する。特に、根域の浅い苗木やわい性台樹は乾燥の影響を受けやすいため、積極的なかん水や草刈り、樹冠下への敷き草など対策を行う。また、マルバ台樹においても可能な限りかん水を行う。

- ①かん水は晴天が3日以上続いた場合に実施する。特に、今年定植や移植をした苗木や若木については、こまめなかん水で土壌水分の保持に努め、生育を確保する。
- ②草刈りは草高30cm以下で行い、木と下草の養水分競合を避ける。樹勢の弱い木は、樹冠下に刈草を敷いて急激な地温の上昇と水分の蒸発を防止する。

2 リンゴ早生種の収穫時期（予想）

本年の県南部の「つがる」の収穫始めは、平年並みの9月2半旬頃、「着色系つがる」は、それより1週間程度早い9月1半旬頃と予想される。「さんさ」の収穫始めは「つがる」よりも約5日早いことから、9月1半旬頃と予想される。本年は高温傾向が続くと予想されており、着色が遅れる可能性がある。着色を待って収穫が遅れると果肉軟化を招くため、収穫期が近づいたら食味を確認する。

3 落果防止剤の散布

落果防止剤の種類と使用方法は表2のとおり。

表2 リンゴの落果防止剤の使用法

薬剤名	使用濃度	使用時期
ストッポール液剤	1000～1500倍	収穫開始25～7日前に2回以内
ヒオモン水溶剤	1000～2000倍	収穫開始21～4日前に2回以内

※ストッポール液剤を2回散布する場合は10日程度間隔をあける

ヒオモン水溶剤は2000倍で使用する場合は2回散布する

※いずれの薬剤も単用散布で展着剤は不要

4 「つがる」の着色管理（摘葉）

早生種の摘葉は、収穫予定の15～20日前から始める。摘葉作業は2回に分けて行い、1回目は、果そう葉を中心に、直接果実に付着している葉をとり、2回目は、果台枝や新梢基部など果実周辺を摘葉し、同時に玉回しも行う。

なお、ストッポール液剤を散布した木は、散布後4～5日経過してから摘葉作業を行う。

本年は、小雨で気温が高く日射も強いことから、果実の日焼けが発生しやすい。日焼けは急激な果実表面温度の上昇も原因の一つなので、強い摘葉は避ける。また、樹冠の外側や上部の摘葉は果実温度が上昇してから行い、それまでは樹冠内部や下枝の作業を行う。なお、朝から明らかに気温が高く日射が強い場合は摘葉作業を控える。

5 見直し摘果

果実の優劣がはっきりしてきたことから、小玉果、変形果や病害虫被害果、サビ果などの障害果は摘み取る。果梗の異常、こうあ部の浅い果実、果台が異常に長い果そうの果実は、着色不良果や小玉果、青実果になりやすいので見つけ次第摘み取る。

また本年、7月初旬からがくあ部周辺が褐変した果実が散見されている(図1)。これは高温による障害と考えられ、褐変部位にたんそ病が2次感染する恐れがあることから、見つけ次第摘除する。



図1 高温障害果

6 台風対策

8、9月は台風の接近が多くなることから、被害を最小限にとどめるよう備えを万全にする。事前の対策として主枝、垂主枝など大枝には木柱を入れ結束固定するほか、わい化

栽培では支柱の強度を確かめ、結束部位の点検と補強を行う。

7 鳥害対策

例年、収穫期が近づくとカラスによる果実の食害がみられる。着色が始まる早生種を中心に早めに防鳥糸を張るなどの対策を講じる。

8 ビターピット対策

「王林」、「秋田紅あかり」などで例年ビターピットが多く発生している園地で、カルシウム剤の散布回数が春から5回に達していない場合は、9月中旬までに併せて5回となるよう散布する。使用するカルシウム剤は次から選択する。

スイカル：500倍、セルバイン：400倍、バイカルティ：1,000倍

いずれも防除薬剤に加用して散布してもよいが、高温が予想されるときは薬害の発生が懸念されるのでカルシウム剤の加用を控え、その分を9月中旬までの防除に合わせ加用するか、単剤で散布する。

9 作業上の留意点

気温が高いと予想される日は、熱中症予防のためにも、なるべく作業を控える。なお、作業を行う際は、帽子を着用し、こまめに水分を取る。

作業中に、めまいや、立ちくらみ、こむら返り、大量の汗が出るなどの症状が出た場合は、涼しい場所へ移動し、水分を十分に取り安静にするなど、決して無理をせずに、体調管理には十分に気を付ける。

ブドウ

1 新梢の管理

旺盛に伸びた新梢や副梢を放置すると棚下が暗くなり、新梢基部葉に十分光が当たらなくなるため、果実の成熟や芽の充実不足、葉の褐変を招く（図1）。新梢管理は、果房周辺の光環境を改善し、翌年にむけた枝の充実や病虫害の発生抑制のために重要な作業である。

新梢が伸び続けている場合は、果粒肥大や着色の向上のために、新梢葉を20枚程度残し摘心する。

副梢は葉を2～3枚残して摘心するが、摘心後も再伸長する場合は、棚が暗くなる前に同様に摘心を繰り返す。また、強勢で果房の無い枝（空枝）は間引いて整理する。ただし、極端な摘心や新梢整理は、日焼け果の発生を助長するため、数回に分けて行う。



図1 新梢の管理が遅れた園地

2 着色管理

「シャインマスカット」は、緑色を保った色合いが好まれるため、青色袋等の被覆資材を用いる。また、気温が高い8月は、直射光が果房に当たらないよう心がける（図2）。

黒系品種のうち、「キャンベル・アーリー」や「スチューベン」は、散乱光でも比較的容易に着色するが、「巨峰」「ピオーネ」は、着色に直射光を必要とするため、棚面はやや明るくなるように管理する。

赤色系品種は、「巨峰」「ピオーネ」よりさらに直射光を必要とする品種が多いため、果房近辺の副梢を切除する等、果房周辺に直接光が入るような管理を心がける。

また、着房数が多い場合、着色不良となり、糖度も上がらず成熟しない。このため、品種の特性に合わせた着房数に調整し、多い場合は摘房する（表2）。



図2 直射光の当たる果房
日焼け果が発生している。
果実の肥大が停止し、着色が進んでいる。

表2 収穫時の着果量

品種 収穫時	キャンベル・アーリー	スチューベン	巨峰系	シャインマスカット
目標果房重(g)	300	300	400～450	500～700
10aあたりの 着房数(房)	8300	6500	2500～3000	2000～3000
目標収量 (kg/10a)	2500	2000	1200	1500

モモ

○生育状況

8月1日現在の果実肥大は、「あかつき」、「川中島白桃」ともやや小さい（表1）。

表1 果実肥大状況（果樹試験場：横手市 令和7年8月1日現在）

樹種	品種	項目	計測値			対比(%)	
			本年	平年	前年	平年	前年
モモ	あかつき	縦径(cm)	6.20	6.41	-※※	97%	-
		横径(cm)	6.63	7.08	-	94%	-
		側径(cm)	6.68	7.17	-	93%	-
	川中島白桃	縦径(cm)	5.73	5.95	6.79	96%	84%
		横径(cm)	5.95	6.29	7.17	95%	83%
		側径(cm)	5.57	6.16	7.16	90%	78%

※平年値は過去10か年の平均値

※※モモ「あかつき」の前年はすでに収穫時期に入っていたため、計測値なし。

本年より調査圃場、調査樹を変更。平年値・前年値・対比は参考のため示す

1 収穫予想

県南部におけるモモの収穫始めは「あかつき」で平年並みの8月6日前後、「川中島白桃」も平年並の8月26日頃前後と予想される。ただし、今後の天候によって収穫時期は変わってくるので、成熟の進み具合に注意する。

2 支柱立て、枝吊り

収穫時期が近づくと果実は急激に肥大するため、果実の重みで枝が垂れ下がり、枝折れや着色不良の原因になることから、支柱立て、枝つりを行う。

3 除袋と葉摘み

除袋の適期は果実が緑色から白色を帯びてくる頃で、収穫の2週間前頃から始める。本年の「川中島白桃」の除袋時期は8月12日頃である。除袋後は灰星病防除を直ちに行う。なお果実の日焼け防止のため、果実温度が低い早朝に除袋しない。

除袋後の葉摘みは、果実に直接触れる2～3枚の葉を摘む程度とする。過度の葉摘みは糖度低下を招くので注意する。

4 収穫

収穫時期が近づいたら、樹勢の弱い木や樹冠の外周など成熟が早い部位の果実の地色や硬さ、食味を確かめて収穫する。

収穫は日当たりの良い樹冠外周から内部へ、枝の先から基部へと進める。収穫適期は地色が緑白色～白色になった頃である。硬さの確認は、手のひら全体で果実を覆うように軽く握って行う。未熟果は弾力が無く、毛じがザラザラし、適熟果はやや弾力を感じ、毛じの感触が滑らかになる。障害等で衰弱した木は、果実の渋みが強い場合が多いので、必ず食味を確かめ、食味不良果は出荷、販売しない。

果実の日持ちを良くするため収穫作業は果実温度の低い朝方に行い、収穫した果実は直射日光を避け、涼しいところで保管する。

灰星病果を見つけたら園外へ持ち出し処分するか、土中に埋める。灰星病は非常に感染力が強いので、発病果を触った手で健全果に触らない。発病果を入れた収穫かご、コンテナは洗浄し、手もしっかり洗う。